

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第九回

ナショナリズムとは何か!?

佐藤 2013年になりました。去年は、日本国内では12月に選挙もありました。米国では

オバマ大統領が再選し、韓国も新しい指導者が誕生しました。今年がどんな1年になるのか、しっかりと見ていきたいものです。

昨年を振り返りますと、尖閣諸島問題、竹島問題と我が国の国境に注目が集まった年でもありました。

昨年の8月に何があったか、おさらいしてみましょう。

2012年8月10日 韓国の李明博^{イ・ミョンバク}大統領（当時）、自国領土とする竹島（韓国側呼び名は独島^{トクト}）上陸。

8月17日 日本の野田佳彦首相（当時）が、李大統領の上陸に対して、親書を韓国に送る。

8月23日 韓国が、その親書を日本に返送する。

8月27日 日本の衆議院が、親書返送に抗議するために、社民党、共産党、新党大地を除く、全議員の賛成で決議案を採択。

——親書を返送って、韓国もどういうつもりだったんでしょうね？

佐藤 この件に関して、当時の政治家、世論の反応は鈍かったですが、この「親書の返送」という行為は、外交の世界では極めて無礼な行為なんです。しかも、こちらの親書は開封すらされていない。戦争直前の状態でもなければ、こんなことはしません。

—大変、まずい行動ではないですか!?

佐藤 なぜこのような事態に陥ってしまったのか？ 国と国との信頼関係はどこへいつてしまったのか？ この日韓関係の問題を見ながら、最終的には「信頼」というものについて哲学的に学んでいきたいと思います。

その前に、まずは「ナショナリズム」について、考えてみましょう。このような一件が起こってしまった背景には、双方のナショナリズムが関係しています。

「ナショナリズム」とは、国家主義、民族主義、国民主義などと訳されていますが、定義づけの難しい言葉です。『民族とナショナリズム』を著したアーネスト・ゲルナーは、「政治的な単位と文化的あるいは民族的な単位を一致させようとする思想や運動」と定義しています。

そしてこのナショナリズムは、時代の変革期においては、エリート階層に駆け上がる一番の近道なんです。

—「エリート階層」とは、国を動かしたりする権力の中核にいる人々のことですか？

佐藤 そうです。たとえば、地方議会の議員、都議会議員、区議会議員が、全国紙でインタビューを受け、大きく扱われるという割合は、国会議員と比べて高いでしょうか？ 低いでしょうか？ 一般的に考えれば、「低い」でしょう。

しかし、尖閣諸島に上陸して帰ってくれば、国会議員でなくともインタビューを受ける可能性は高くなります。尖閣諸島に上陸して、ひと暴れすれば、新聞に取り上げられる。大きなコストも掛けないで、自分の名前を全国に広めることができる。

そこで、「愛国者である！」「日本の領土を守れ！」と声高に叫べば、知名度は上がり、選挙に出れば民意を集めて当選する可能性が出てくる、ということもあり得ます。いわば、エリート階層への入場券を得ることができるんです。

まあ、仮にの話ですが、エリートを官僚と政治家に限定して話せば、青春の多くの時間を、一生懸命、勉強に費やしてきたAくんが官僚になったとします。一方、中学時代のAくんの知り合いで、地元で暴走族をやっていたBくんが、日章旗を尖閣諸島で振り回して、「俺は愛国者だ」と叫んだ結果、全国に名が知れて政治家になり、AくんはBくんの指示、命令を受ける立場になった……。

歴史を振り返ってみても、時代の変革期においては、このようなことが往々にしてあるのです。

——でも、そんなことで民意を集めてエリートの仲間入りって、なんだかおかしくないですか？ 民意といえば福島原発事故以降、原発や政治に関して「民意を問うべきだ！」と盛んに耳にするようになりました。そもそも「民意を問う」って何なんでしょうか？

佐藤 この「民意」というものも、よくよく考えなければいけません。多くの人々は、「民意を問う」意味を履き違えています。

日本のエネルギー政策の未来を決めるために、原発に依存するのか、原発をなくすのか、それを決めるためには、「民意」が必要なはずです。

——必要でしょうねえ。

佐藤 明らかに、民意が必要な問題です。

では、大飯^{おおい}原発を再稼働させるか、否かについてはどうでしょうか？ 「民意」は必要でしょうか？

——いや、そりゃー、安全かどうか、住民の皆さんが安心しないとイケないので、民意を問う必要はあるんじゃないですか？

佐藤 確かに、そうかもしれませんが、それはあくまで、心情・感情の問題です。近代民主主義国家が正常に機能しているならば、民意を問うのではなく、専門家の判断に基づいて、再稼働するかどうか、判断することになるはずですよ。なぜなら高度で専門的な知識がない限り、再稼働するには、どこに問題があるのかわからないからです。

国のエネルギー政策を決めるための原発の是非は民意を問わなければいけません、大飯原発の再稼働については、専門家の判断に委ねる問題です。

—なんで、そうになってないんでしょうか？

佐藤 専門家の判断が、やらせであるとか、歪められているという事案が出てきたからにはかなりません。すると、世間は専門家すら信頼できなくなる。

皆、誰が正しいことを言っているのか、判断できなくなっているのです。

ナショナリズムの二つの見解

佐藤 さて、「ナショナリズム」の起源には、大きく2つの見解があります。

ひとつは、ナショナリズムは近代に生じた現象であり、その起源を近代以前にさかのぼって求めることはできないとする考え方。これを「近代主義」あるいは「道具主義」といいます。

もうひとつは、近代のナショナリズムを成立させるための起源が、古代より継承されているとする考え方。こちらは「原初主義」と言われます。

「近代主義」の代表的な提唱者に、先に挙げた『民族とナショナリズム』のアーネスト・ゲルナーや、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』を著したベネディクト・アンダーソンがいます。

近代主義をとる人は、前近代においては、階級・職業・言語・地理的要因などにより「国民」「民族」は分断されており、包括的な共属感情が存在していなかったと考えます。

—日本で言うと、いつからになるんでしょうか？

佐藤 われわれ日本人は、日本人であるという感覚を、戦国時代に持っていたでしょうか？ 答えは、否と考えられます。当時の人々は、織田信長が治める国の人間、武田信玄の治める国の人間、というようにバラバラであり、「日本人である」、という感覚は持ち合わせていなかったでしょう。政治的意識は、個々の領主に向けられていたはずで

明治維新の戊辰戦争ぼしんにおける会津藩、長州藩などにおいても、彼らは、同じ日本国民、同じ民族であるという感覚は乏しかったと思われ

近代主義のベネディクト・アンダーソンは、民族とは「想像の政治的共同体 (imagined political communities)」と定義しています。それは主権的なものであり、しかも限定的なものです。

—主権的、限定的とはどういうことですか？

たとえば、自国の民に対して個々の財産を「税金として出せ」と言ったり、軍隊に対して「お国のために死ぬ」と言ったり……そうした命令ができる権力です。

また民族が限定的ということは、いくら民族が大きくなっても、世界と一体とはならないということ。仮に中国人が 13 億人、14 億人と増えていったとしても、世界全体が 70

億人の一つの民族にはならないわけです。

対して原初主義は、かつて団結してカエサルに抵抗したガリア人などが古代にいたことを例に挙げ、ナショナリズムに類似した現象が近代以前にあり、それが継承されてきたものだとしています。民族は血筋や、地理、経済的な共通性、言語などによって結びついているという、何か民族の根拠となる根源が具体的にある実体主義的な考え方です。

こうした原初主義の方が、民族を定義する上で、一般的かもしれません。我々が日常的に言うところの民族、高校までの教科書に出てくる民族は、原初主義に即しているのではないのでしょうか。

ところが、学術的な研究の成果で明らかになっているのは、民族の概念は近代とともに生まれたもので、それ以前はなかった、ということです。先の戦国時代や、明治維新当時の日本人の個々の認識の例からもわかりますね。

それでは、原初主義を提唱する人たちの「団結してカエサルに抵抗したガリア人たち」といった集団は、やはり民族ではないのか？ そうした疑問も出てくると思います。そのため、近代主義と原初主義の主張を包括的に考え、新しい視座を提唱したのがアントニー・スミスです。

『ネイションとエスニシティ』のなかで、民族（ネイション）の基盤となる人間集団のことを「エトニ」と名づけました。

——エトニ???

「エトニ」とは、フランス語ですが、ギリシャ語起源の言葉で、共通の祖先、歴史、文化を持ち、ある特定の領域との結びつきを持ち、内部で連帯感を持つ、名前を持った人間集団のことです。ただし、必ずしもエトニが民族（ネイション）になるわけではありません。

この集団は、ある状況によって、ひとつの民族になったり、ならなかったりします。歴史の様々な要因に左右され、結びつきを変えていきます。

さらに彼は、

＜エスニックなアイデンティティを押さえるこうした神話、記憶、象徴が持つ内在的な意味を理解せず、その力を評価しないならば、現代世界における国家と個人との関係を混乱させているエスニックな対立を把握することはまったく不可能である。＞

※エスニック＝民族的（編集部・注）

と述べています。

要するに、民族問題を、経済合理性や人権といった切り口から問題を解明しようとしても、袋小路に入ってしまうので、一定の人間集団が持つ神話、記憶、象徴など、非合理的にも見える現象の内在的論理の解明が不可欠だと、スミスは言いたいのです。

ナショナリズムを作り出したのは誰？

佐藤 民族の歴史というのは、たかだか二百数十年前までしか^{さかのぼ}遡れない。それ以前にな

ると、民族という概念はない。これが近代主義。

しかし、ここでふまえておかなければいけないのは、ゲルナーも、アンダーソンも、広い意味でのマルクス主義の影響を受けて近代主義を提唱している点です。

近代において支配者階級と労働者階級が誕生しました。産業社会の誕生と国民形成の関連性から民族とナショナリズムについて研究しています。

ですから、私は、近代主義という切り口よりも、道具主義の視座で見たほうが、じっくりくるのではないかと思っています。

——道具主義ってなんでしょうか？

佐藤 道具主義とは、「概念、理論は、それらがいかに精密で無矛盾であっても、仮説とみなされるべきである。概念、理論は、道具である。すべての道具と同様に、それらの価値は、それ自身の中にあるのではなく、その使用の結果、あらわれる作業能力（有効性）の中にある」というアメリカの哲学者ジョン・デューイの考え方です。もちろん道具主義も近代主義の流れに属します。

産業社会で生まれた資本家たちや、支配する階級が、自分たちの暖かい場所を維持するために、自分たちが国民、民族の代表である、こういった形を作るために、いろんなイデオロギー操作、イメージ操作をおこないました。その結果、エリート層というものが生まれ、さらにそれらの人間が、自分たちの特権を維持するためにナショナリズムという物語（道具）が必要だったのです。

ナショナリズムが先、ネイションが後なのです。

ナショナリズムは、支配する階級、エリート層が操作可能である、と考えました。しかし、そうではありません。確かに、民族感情を煽りたてることは容易にできます。

実際、竹島に韓国大統領が渡り、さらに、日本からの親書を受け取らず送り返してきた。こうした事実を大々的に報道することで、日本のナショナリズムのネジをギリギリと巻いて高揚させることはできます。

けれども、反対にそれを緩めることはできません。

——ナショナリズムは、行ったら、戻ってこられないって訳ですね。

佐藤 ナショナリズムは非対称なんです。

政治エリートたちは、ネジを巻いて、激しい方向には持っていける。しかし、それを緩和させることはなかなかできません。

なぜならば、もし高揚したナショナリズムを緩めようとする、「あんた、なに、軟弱なことを言ってるんだっ!？」と国民に言われてしまうからです。

——日韓が衝突する可能性が高いという状況なのですね。

佐藤 このまま行くと、戦争になる前に確実に、人が死にます。

—一人が死にますか？

佐藤 たとえば、韓国で慰安婦像や、博物館の前で、「竹島は日本の領土です」と札を結び付けている右翼系の人々。これらの人が、現地の警察に捕まれば、まだいいですが、韓国挺身隊問題対策協議会などの、韓国右翼に捕まれば、半殺しにされるかもしれない。

さらに、もし尖閣諸島に旗を掲げて目立った輩が、これはいいと、今度は「おいら、竹島にも行く」という行動をとったらどうなりますか？

—韓国の守備隊が実効支配し、常駐する竹島に行けば、それは、射殺されるんじゃないでしょうか？

佐藤 モーターボートで行けば、ミサイル撃ち込まれて撃沈。死者が出ます。

—まさに日韓関係は、一触即発じゃないですか!!

佐藤 仮に竹島で、日本人が射殺、乗ったボートが撃沈ということが起これば、日本国内では、酔っぱらった日本人酔客が、繁華街の韓国人バーで、韓国人ホステスをぶん殴ることも起こるかもしれません。すると、店の韓国人用心棒が来て、その日本人酔客はボコボコに叩かれて、死んでしまうことだってないとは言えません。

—双方のナショナリズムがよりヒートアップして、後戻りできない状況になりますね。昨年中国での反日暴動の際、中国国内の日本人が外出を控えたような状況が、日本国内にも生まれてしまうのですね。

ナショナリズムは、非対称ということでしたが、双方に偉大なる指導者が現れて、それぞれのナショナリズムを沈静化することはできないのでしょうか？

佐藤 おそらくできません。ナショナリズムのポイントは、特段の「指導者」はいないけれど、そういう「運動」が生まれてくるところにあります。

我々一人一人がその「運動」を作り出しているのです。

マルクス主義の指導者は、マルクスであり、レーニン。

ナチズムだったら、ヒットラー。

ファシズムならば、ムッソリーニ。

では、ナショナリズムの指導者って、誰でしょうか？ 過去の歴史の中にいましたか？

—うーん、そう問われると、いないですね。

佐藤 そう、いないんです。

—ナショナリズムには指導者はいない。そして動き出したら、止められないということ

なんですね。

〈つづく〉

今月の内容をより深く学ぶための本

『ネイションとエスニシティ』

アントニー・D・スミス著（名古屋大学出版会）

『民族とナショナリズム』

アーネスト・ゲルナー著（岩波書店）

『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』

ベネディクト・アンダーソン著（書籍工房早山）